

法隆寺式唐草瓦中心飾文の様式史的意味について

上 原 和

は し が き

さきに私は、美学会第一三回全国大会の東洋美術部門において、「日本上代の装飾文様に見られる蟠螭文系モチーフとその展開について」という題目で、いささか卑見を述べるところがあつた。(註一)

蟠螭文というのは、周知のように、かつて漢代において盛行をみた、竜の体軀のくねるC字形乃至はS字形をモチーフとして各様に展開された蔓草文(Die ornamentale Ranke)をいうのであるが、そうした蟠螭文系のモチーフが、法隆寺系諸建築の軒平瓦の瓦当の文様意匠の上に、すなわち法隆寺式唐草瓦と称せられる一連の白鳳瓦の唐草文の上にも、その中心飾として現われてくることを示唆し、詳細は後日に期しておいたので、いまその約を果しておきたい。

なおここで法隆寺式唐草瓦というのは、宝珠形の中心飾はさんで、その左右に、蕾形と葉形とを伴つた波状の蔓草が相称的に伸びている波状連続の忍冬唐草文をその瓦当の文様にもつ軒平瓦をいうのであるが、様式史的にきわめて重要なことは、この種の文様をもつ軒平瓦が、朝鮮、中国からは未だ出土された事例を全く見ていない点である。朝鮮、中国にその出土例を求めえない以上、この法隆寺式唐草瓦は日本での創意になるものと見做さざるをえないことになるわけであるが、法隆寺式唐草瓦がはたして日本での創案になるものかどうかの検証は法隆寺式唐草瓦の形式的特徴を仔細に検討する以外にはないわけである。私は、法隆寺式唐草瓦の中心飾に日本上代に盛行を見た蟠螭文系のモチーフの展開の名残りが認められる点に法隆寺式唐草瓦の日本創案説の根拠をおくのであるが、本稿においては忍冬唐草文など六朝及

び隋、初唐において盛行をみた西方伝来の植物系モチーフが汨濫していた日本上代にあつて、白鳳盛期の法隆寺式唐草瓦の上に、かつて漢代に盛行をみた蟠螭文系のモチーフが、どのような形式変容の過程をへて現われてくるのかその様式史的展開について言及しておきたいと思う。

一

さて日本上代に盛行をみた唐草文については、これまで、北魏をはじめ六朝において著しい流行を示した西方伝来の忍冬唐草文など植物系のモチーフが、そのまま仏教伝来と共に我が國に伝えられ、それが多様の展開を見たものと見做されて来た。

しかし、私は、玉虫厨子の制作年代の解明の一助として、その文様を検討していくうちに、確かに玉虫厨子にあらわれた唐草文様は、仏教渡来と共に盛行をみたであろう忍冬唐草文の影響を受けているとはいへ、その透彫金具にあらわれた唐草文は必ずしも中国六朝に流行をみたそのままの忍冬唐草文ではなく、その主要なる文様組成の上に非植物的なモチーフの存することを見のがすわけにはいかなかったのである。

いま、玉虫厨子の透彫飾金具にあらわれた唐草文を見るに、同じくこの厨子の彩画意匠の上にあらわれて来る唐草文が、明らかに全パルメットの忍冬唐草文として識別され得るのに対して、飾金具意匠の上では、蕾形を有するはつきり忍冬文と判る波状連続唐草文の一例以外は、そこにあらわれる

唐草文は、すべて定かに植物的標徴と判る蕾形ないしは葉形を有しないのである。にも拘らず、従来は、こうした植物的標徴を有しない唐草文も、すべて植物系モチーフの唐草文と信じて疑われることがなかつたのである。

ところで、これはすでに先学によつて指摘されてきたところではあるが、玉虫厨子透彫飾金具の上にあらわれた唐草文は、およそこれを二種類に大別することができる。すなわち横飾帯にあらわれてくる波状連続の唐草文と、縦飾帯にあらわれてくる逆ハート形の中心飾を基調とする唐草文とである。いずれも従来、忍冬唐草文の変態と見做されてきたものである（註二）。しかし果してそうであろうか。

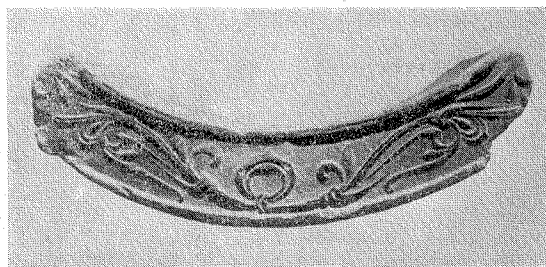
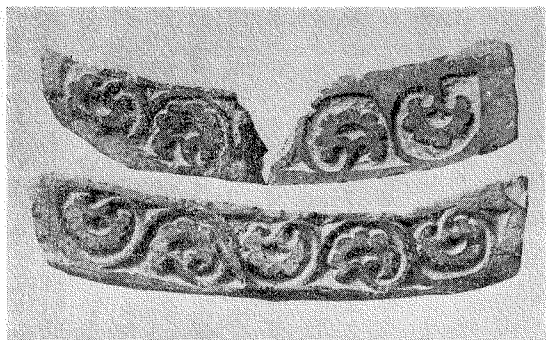
まず、最初の波状連続の唐草文についてであるが、この植物的標徴のない唐草文が、玉虫厨子において、彩画意匠の上にはなく、透彫飾金具の上にのみあらわれていることに、私は注目せざるを得なかつたのである。そこで想起されるのは、応神天皇御陵から出土された大阪府誉田八幡宮所蔵の鞍橋飾金具の唐草文についてである。この金銅透彫の唐草文も、一見、植物系の唐草文と見誤まれがちであるが、しかし、玉虫厨子飾金具の場合と同様、植物的標徴を全く有せず、しかも、これを仔細にみるときに、そこにはさし向いになつた竜首形が、はつきりと識別され得るのである。これは、まがいもない蟠螭文の唐草である。私は、かくしてここに、蕾形や葉形のない唐草文の祖形をみるのである。この誉田八幡宮所蔵の飾金具は、その出土箇所よりして、五世紀代の遺

図版説明

(右) 玉虫厨子飾金具縦飾帯

(左上) 若草伽藍址出土軒平瓦

(左下) 法隆寺西院伽藍址出土軒平瓦



品であることは、疑いようもないことであり、従つて、金銅透彫の金工技術と共に、この蟠螭文系の唐草文が、すでに仏教伝来一世紀前の、所謂、五王時代には、早くも日本本土に定着されていたものと考えられるのである。ところでそうした鞍橋飾金具などをすべて朝鮮ないしは中国よりの舶載品と見做すむきもあるであろうが、ここで興味があることは、菅田八幡宮所蔵のこの鞍橋飾金具には同型二通りあり、一つは明らかに他の一つを真似て模造している点である。すなわち蟠螭文としての Pattern はいまだ熟知し得てはいないが、金銅透彫の技術はすでに習熟し得ていたことを、この仿製品は如実に示しているのである。

次に、本稿において特に問題になるのは、玉虫厨子飾金具の縦飾帯における唐草文であるが、この唐草文に著しい形式の特徴は逆ハート形の身部とx字形の脚部とで組成される團華状の唐草である。この唐草文は、蕾形、葉形などの植物的標徴を全く有していない点においては、前の波状連続唐草文の場合と同様である。この植物的標徴を有しない團華状唐草文も、従来、先学によつて忍冬花の変形と見做されてきたが(註三)、その後近年に至つて、この忍冬花変形説に反論が加えられている。すなわち、この逆ハート形の身部とx字形脚部との組成文の祖型を、百濟扶餘王陵出土の王冠透彫飾金具の中心飾文にみる、そしてそれを蟠螭文系モチーフと見做す小杉一雄氏の爬虫唐草分立説がそれである(註四)。

私もまた、玉虫厨子飾金具の縦飾帯にみられるこの團華状

唐草中心飾文の祖型を、この扶餘出土の遺品の上に見ることがには賛成であり、その文様組成が、マサカリ状の瘤節を有するC字形の集合よりなつている点からみて、私もこれを、蟻螭文系モチーフに発しているものと見做してきたのであるが、私にとつて最も興味の深い問題は、むしろ漢代盛行の蟠螭文の形態に特有であつた扶餘遺品での硬殼的な形態感が、何故玉虫厨子においては、軟体的な形態感に変容しているかについてであつた。私は、玉虫厨子にみる逆ハート形とx字形との組成文をその軟体動物的な形態感からして、特に蟾蜍形（ひきがえる形）中心飾文と命名しておいたのであるが、ここできわめて重要なことは、そうした形態感の変容が祖型移植後の日本の風土においてなされたという点である。何故ならば、我々は、こうした気味の悪い形態感を持つ蟾蜍形中心飾文の例を、仏教渡来以前の古墳出土遺品である馬具杏葉の透彫飾金具の上に、あるいは、圭首形太刀柄頭の透彫飾金具の上ですでにみることができるところである。

すなわち、扶餘遺品においては、恐らくその圭首形よりして瑞祥をあらわす博山を意味していたであろう中心飾文が、仏教渡来以前、日本に流入されるに及んで、精霊を宿す表徴として用いられたものと考えられるのである。仏教渡来以前と以後を問わず日本上代の蟾蜍形中心飾に見られる形態感の変容には、こうした風土的なアニミズムの影響があつたものと推察され得るのである。ところで、こうした蟾蜍形中心飾文もまたその遺例が示すように、仏教渡来以前に習得された

金銅透彫の技術の上に展開されていることは見のがされてはならないわけであるが、仏教関係の遺品の上においても、この蟾蜍形中心飾文の展開は、法隆寺金堂四天王像の宝冠、同じく夢殿観音菩薩像の宝冠、あるいは、法隆寺綱封藏にある幡の、それぞれの飾金具の透彫文様の上に、またその場合、冠なり幡頂なりの、ものの標徴とも言うべき箇所を中心飾としてあらわれてくることに、とくに注意したいと思う。すなわち、博山としての瑞祥の意味、ないしはその変容としての精霊の宿りとしての意味は、飾金具の技術と共になお受け継がれているように思われるからである。

二

さて、そこで、法隆寺式唐草瓦の中心飾文についてであるが、私がここでまず注目しておきたいのは、忍冬花と目されてきたこの中心飾文が、逆ハート形を成している点である。一体、六朝盛行の忍冬唐草文において、そこに花形が表現される場合には、その花形は、全パルメット形式をとるか、あるいは、茎の分岐点から出る紡錘形の蕾状に表現されるか、のいずれかであつて、逆ハート形の花形表現をとることは、まずあり得ないからである。

では、そうした忍冬唐草文における花形の定形的表現を破つて、何故、この法隆寺式唐草瓦においては、その花形に擬せられている中心飾文が、ことさらに逆ハート形をとるのであろうか、そこには何らかの理由がなければならぬ筈であ

る。そこで、この逆ハート形に関連してもい起されるのは先に述べてきた蟠螭文系の蟾蜍形中心飾文における逆ハート形である。私は法隆寺式唐草瓦中心飾の逆ハート形を、この蟾蜍形中心飾の変形とみるのであるが、そうした私の見解が果して妥当なものであるかどうかを、法隆寺式唐草瓦の中心飾の形式的特徴を蟾蜍形中心飾のそれと比較することによつて、検討してゆきたいと思う。

法隆寺式唐草瓦における中心飾の逆ハート形にとつて、もつとも著しい形式的特徴は、内廓外廓の二重円弧の嵌め込み式になつてゐることである。こうした二重円弧の嵌め込み式は、実は、蟾蜍形中心飾文において、もつとも基本的な形式的特徴としてすでに示されてゐるところである。すなわち、そうした複合組成の方式の例として、玉虫厨子金銅透彫飾金具の蟾蜍形中心飾文、あるいは、その祖型と目され得る百濟扶餘出土遺品の王冠金銅透彫中心飾文などに容易にみられ得るのである。こうしたそれぞれの遺品にみられる蟾蜍形中心飾が蟾蜍文系のものであることはすでに述べたところであるが、蟾蜍形中心飾文をこのように蟠螭文系であると目する理由の一つには、この中心飾の身部である逆ハート形の外廓の円弧に瘤節がみられることであつた。すなわち、C字曲線に瘤節を伴うということが、蟠螭文のもつとも基本的な形式的特徴をなしているからである。いま、法隆寺式唐草瓦中心飾の逆ハート形をみるに、その逆ハート形の外廓円弧には、まがうべくもなく、こうした蟾蜍形中心飾の逆ハート形外廓円

弧にみられる瘤節がみてとられるのである。また、逆ハート形円廓が猪の目形の空穴をなすことも蟾蜍形中心飾の逆ハート形にみられる基本的特徴の一つである。加うるに、扶餘出土遺品や玉虫厨子の場合に示された猪の目形空穴の底部の尖りは、法隆寺式唐草瓦の場合は空穴の上部にはあるが同様にあらわれているのである。

さらにまた、法隆寺式唐草瓦の中心飾において、見逃がすことのできない形式的特徴は、花形に擬せられてゐる筈のその逆ハート形がじつは蔓草の茎の上に直接開花してゐるのではなく、二条の結節によつて、蔓草の茎と逆ハート形の底とが結びくられてゐる点である。すなわちこうした方式は忍冬唐草文における花形表現としては類例をみないものであるが、ここで注意しておきたいことは、じつは、その二条の結節についてである。こうした二条の結節もまた、玉虫厨子金銅透彫飾金具の蟾蜍形中心飾文において、 \times 字形の脚部の結目としてあらわれてきてゐるからである。こうした二条の結節は、扶餘出土遺品の中心飾にはあらわれてはこないが、玉虫厨子や法隆寺綱封蔵金銅幡にみられる蟾蜍形中心飾文においては、著しい形式的特徴をなしてあらわれてくるのである。こうした二条の結節は、すでにサーサーン王朝時代の唐草文様には、しばしばあらわれており、そこでも同じように唐草文のパールメット花形をのせる \times 字形の脚部の結目としての役割を果しているわけである。すなわち、こうした二条の結節は、サーサーン王朝の唐草文の例でみるように、もとも

と、西方伝来の植物系唐草文の標徴の一つなのである。つまり、玉虫厨子の蟾蜍形中心飾においては、すでに述べたように、この飾文はもともと、蟠螭文に由来していたために、葉形や花形などの、植物文としての標徴は有してはいないが、こうした二条の結節が示されている点からみて、やはりその蟾蜍形中心飾文には、本来の蟠螭文系モチーフに加わるに、西方伝来の植物系モチーフの複合があつたことも見逃されてはならないのである。すなわち、法隆寺式唐草瓦にみられる二条の結節はその名残なのである。

以上の検証によつて、法隆寺式唐草瓦にみられる宝珠形の中心飾文が、これまで言われてきたような忍冬花形をあらわすものでなく、玉虫厨子飾金具の縦飾帯にみられたような蟾蜍形中心飾文の系統を継ぐものであることがおおむね明らかになされた筈である。

三

次に、法隆寺式唐草瓦の様式史的変遷を、その中心飾文の形式変容の過程を追つて検討してゆきたいと思う。

法隆寺式唐草瓦について語る場合、ただちに想起されるものは、法隆寺西院伽藍より発見された、所謂、法隆寺忍冬唐草瓦であるが、この法隆寺忍冬唐草瓦は、かならずしも、法隆寺西院伽藍からのみ出土される法隆寺独特のものではなく、同型の唐草瓦は、法隆寺附近の法輪寺、法起寺、中宮寺、高安麿寺など、また、王寺の北の平群寺、額田の熊凝精

舎址、さらに、河内からも、山陽、山陰、四国、九州からも、また伊賀、近江、尾張などからも出土されて、その種類は実に四十幾種を数えている。しかし、そうした極めて種類の多い法隆寺式唐草瓦も、これを逆ハート形中心飾の形式発展からみるとときには、およそ四つの段階的な変遷をみる事ができる。法隆寺式唐草瓦の中心飾の形式変容に着目して、法隆寺式唐草瓦を四種類に種別なされたのは、石田茂作氏であるが（註五）、法隆寺式唐草瓦の逆ハート形は、およそ次のような形式変容の過程をとつていくことが判る。

まず第一には法隆寺西院伽藍出土の唐草瓦にその典型をみる内外廓二重円弧嵌め込み式であり、第二には、その外廓と内廓との間に混入線のみる形式であり、第三には、その混入線が点に凝結し、外廓が次第に逆ハート形としての基本形態を失つてゆく形式であり、第四は、もはや、中心飾が本来の逆ハート形から著しく変化してしまつた形式である。こうした逆ハート形中心飾の形式変容は、とりもなおさず、その瓦の唐草文の時代的乃至は地方的様式変遷の過程を示しているものと言えよう。すなわち、法隆寺式唐草瓦中心飾文にみる逆ハート形が、その原型である蟾蜍形中心飾文の形式的特徴から遠ざかる形式変容の過程をそこにみることができるところで、こうした法隆寺式唐草瓦の盛行年代についてであるが、石田茂作氏は、法輪寺出土の唐草瓦を、第一の形式の唐草瓦の基本形態と目し、もし、法輪寺の創造年代が、上宮聖徳太子伝補闕記などに言われているように、天智天皇九

年（六七〇）の法隆寺羅災後であるとするならば、この唐草瓦盛行の時代は、この天智天皇九年よりあまり隔たらぬ時代になる。その上限があるとされたのである。しかし、ここで疑問になるのは、法隆寺式唐草瓦の上限年代を天智天皇九年前後におく根拠となつた法輪寺唐草瓦は、果して石田氏の言われるように、法隆寺式唐草瓦中の最も優れた典型的な基本形態と見做され得るか否かである。石田氏は法輪寺唐草瓦の中心飾の形態に着目され、それが蝙蝠形の中心飾を持つが故に、この法輪寺唐草瓦の方が、法隆寺西院の唐草瓦よりも、より基本的な形態であると目されたのである。だがしかし、この両者は、その形式的特徴の上から言えば、一体、いずれが基本形なのであるか。その制作年代から言えば、法輪寺唐草瓦も、法隆寺西院唐草瓦も、いずれもその推定され得る両寺の建立年代よりして、天智天皇九年以降、すなわち、白鳳盛期の制作と見做され得るわけであるが、両寺出土の唐草瓦の中心飾を比較する時には、法隆寺西院唐草瓦の方が、形式的に先行するのである。何故ならば、両方の唐草瓦の中心飾は共に先に述べた内廓外廓二重円弧の嵌め込み式であるが、法隆寺西院唐草瓦の方が、玉虫厨子飾金具の蟾蜍形中心飾の逆ハート形により近いからである。法輪寺唐草瓦の方は、石田氏の言われるように、その形態は蝙蝠形を示しており、蟾蜍形の中心飾の逆ハート形に個有の諸特徴よりかなり遠ざかつているのである。先も述べておいたように、法隆寺式唐草瓦の中心飾に則してみる限り、その様式年代の如何は、蟾蜍形中心

飾の基本形態により近いが、遠いかにある筈である。

では、何故、共に白鳳期に制作された筈の法隆寺西院唐草瓦と法輪寺唐草瓦との間に、様式年代の相違が予想されるこのような形式的特徴の対立があるのであるか。

そこで私は、法隆寺西院唐草瓦に極めて類似する逆ハート形の中心飾をもつ唐草瓦が、法輪寺東院の斑鳩宮址からも発掘されていることを指摘しておきたい。この斑鳩宮址出土の東院唐草瓦には、火にあつた形跡があり、それによつて皇極天皇二年（六四三）の斑鳩宮羅災前の瓦であることがうかがわれ得るのである。それ故、逆ハート形を中心飾とする法隆寺式唐草瓦の基本形態というものは、この斑鳩宮羅災の皇極天皇二年以前に、斑鳩宮の軒平瓦の瓦当の文様として、すでに現われていたものと見做され得るわけであり、再建法隆寺の西院唐草瓦は、この斑鳩宮址出土の東院唐草瓦の、直接的な形式継承を示しているものと考えられるのである。

では、斑鳩宮址出土の東院唐草瓦にその先蹤をみる法隆寺式唐草瓦の上限は、この皇極天皇二年より、どれ程遡上り得るのであるか。そこで、この問題に關連して考えられるのは、斑鳩宮羅災の皇極天皇二年より二年前の舒明天皇一三年（六四一）にその建立年代をもつ山田寺址出土の軒平瓦についてであるが、この山田寺軒平瓦には未だ如何なる唐草文も現われず、そこには、推古創建の明らかな飛鳥寺、あるいは四天王寺の伽藍址から出土の軒平瓦にみられるところの推古伽藍出土軒平瓦に個有の重弧文をみるばかりである。もつと

も、推古創建の明らかな斑鳩寺の伽藍址、すなわち若草伽藍址からも、俗に銀杏唐草文と呼ばれるところの全パルメツト形波状連続唐草文を有する軒平瓦が現われているが、この若草伽藍址出土軒平瓦にみる唐草文と同種類の文様は、すでに高勾麗古墳の遇賢里中墓の持送の壁面に現われている点からみて、移植過程とその様式年代とはほぼ明らかであり、法隆寺式唐草瓦の唐草文の出土例が、中国、朝鮮において全くみられないのとは対照的である。若草伽藍址出土軒平瓦と斑鳩宮址出土の法隆寺東院唐草瓦との間には、かくして文様の形式発展の上に明白な断絶が指摘され得るのである。

思うに創建法隆寺の伽藍址である若草伽藍址出土の軒平瓦が未だ高勾麗伝来の全パルメツト形唐草文である点からみて、また舒明天皇一三年(六四二)創建の山田寺址出土の軒平瓦に、未だ推古伽藍に個有に重孤文であることから推して、斑鳩宮時代に法隆寺式唐草瓦が現われるとしても、それは斑鳩宮時代の末期、すなわち斑鳩宮罹災の皇極二年(六四三)に極めて近い年代であつたと考えられるのである。法隆寺西

院唐草瓦と法輪寺唐草瓦との両者の中心飾の間に、明らかな様式対立が見られるのは、かように西院唐草瓦の Pattern がきわめて忠実に東院唐草瓦のそれを継承しえていたからであり、白鳳盛期になると法輪寺唐草瓦の例で見られるようにもはや蟾蜍形中心飾はその本来の Pattern を失ってゆくこととなるわけである。それとともに、恐らくアニミズム的な意味をうけて、軒先の護符として意匠されていたであろうこの法隆寺式唐草瓦の蟾蜍形飾文も、その本来の呪術的意味を失うことになったものと思われるのである。

註一 「美学」第五一号所収(昭和三七、一二、三〇)四〇頁

註二 伊藤忠太「玉虫厨子の文様と其源流」(「仏教美術」第十

三册所収 昭和四、六、一〇)六五頁

註三 前出 六四頁

註四 小杉一雄「中国文様史の研究」殷周時代爬虫文様展開の系

譜一(昭和三四、五、三〇)一七四頁

註五 石田茂作「法隆寺式忍冬唐草文字瓦の分布」(「伽藍論攷」

所収 昭和二三、一〇、三〇)八〇頁